

アジア研究センター共同研究

# アジアの社会遺産と 地域再生手法

レクチャーシリーズ

# 2

Kanagawa University Center for Asian Studies

社会遺産(social heritage)は、生まれたときにおかれていた社会的環境を指す用語である。社会遺産は主として人に対して使われることが多いが、地域や都市もそれぞれ社会遺産を有する。アジアの諸都市は、近代において似たようで異なる複雑な国際的背景の中でそれぞれ発達してきた。近年、アジアの諸都市では地域再生が活発に行われており、それら再生事例を対象とした研究も見られる。しかし、それらの研究の多くはガバナンスなど再生手法に関するものである。本共同研究では、それらの事例を「社会遺産」から見ることにより、その地域の歴史的・文化的・政治的文脈から重層的に分析することが可能になると考える。

共同研究では、アジア各地の地域再生事例とその周辺を対象としたフィールドワークをもとに検討を進める。2019年1月、タイ・バンコクにおける低所得者居住区の調査を実施した。2020年1月には中国・広州の客家調査を計画し準備を進めていたが、COVID-19感染拡大による渡航自粛から調査は中止となった。夏を過ぎても感染が治まる気配はなく、フィールドワークを手法とする私たちの研究は方向転換を余儀なくされた。一方で、オンライン授業などで導入したZoomといったオンラインミーティングシステムは、普段なかなか会えない海外研究者たちとの距離を縮めてくれる利点をもたらした。

そこで、2020年度後半から2021年度にかけて、アジアの都市・地域をフィールドにもつ研究者・実践者に登壇いただく連続レクチャー(公開講演会)を企画・開催することとした。リアルな場からデスクトップ越しのフィールドワークへの転換である。アジアの地域・都市再生事例の課題・背景を、社会遺産という観点から捉え、相互比較した上で、国際的討論を深めることを目指している。ここに収録された連続レクチャーの記録を通じて、再生手法としてのアジア的計画論について議論を深めるきっかけになれば幸いである。

神奈川大学工学部建築学科教授  
神奈川大学アジア研究センター所長  
共同研究「アジアの社会遺産と地域再生手法」代表

山家京子



アジア研究センター共同研究

「アジアの社会遺産と地域再生手法」レクチャーシリーズ

## Vol.2

# ハンドメイド・ アーバニズム

ユン ジュソン  
尹柱善

(建築都市空間研究所まち再生センター長)

# INTRODUCTION

山家京子(神奈川大学工学部建築学科教授)

**山家** これからアジア研究センター共同研究「アジアの社会遺産と地域再生手法」の公開講演会を行います。今日の講演者のユン・ジュソンさんを簡単にご紹介します。この「アジアの社会遺産と地域再生手法」の前研究の共同研究メンバーでもあり、同じ共同研究メンバーのチョン・イルジ先生のご紹介です。大学院は東京大学都市工学専攻西村幸夫研究室のご出身です。地域SNSとまちづくりという非常に興味深いテーマで博士論文を書かれています。2015年に建築都市空間研究所、日本でいう国土地理院に当たるところに入社され、2019年からまち再生センター長を務められ、現在は地方都市の地域性を生かしたスタートアップの支援、リノベーションまちづくりの専門家たちとのネットワークづくりなどを進めていらっしゃいます。今日は、<sup>クンサン</sup> 韓国の群山における、官民共同によるDIY的なまちづくりについてご紹介いただきます。それでは早速ですが、ユン先生、よろしくお願いします。

**ユン** ユン・ジュソンと申します。日本語に慣れていないので、途中で英語が交じるかもしれませんが、失礼します。では、ハンドメイド・アーバニズムというタイトルで発表を始めます。よろしくお願いします。

# LECTURER



**尹柱善**

(建築都市空間研究所まち再生センター長)

2014年、東京大学都市工学専攻にて「地域SNSとまちづくり」というテーマで博士号を取得。2015年、建築都市空間研究所(国土研究院)入社。2016年から韓国・群山で官民協働によるDIYまちづくりを企画・実践中。2019年よりまち再生センター長。現在、地方都市の地域性を活かしたスタートアップの支援、リノベーションやまちづくりの専門家たちとのネットワークづくりなどを進めている。

# LECTURE

**近代を経て、再び生産者＝消費者の時代へ**

私が働いている建築空間研究院は、先月、建築都市空間研究所から研究院に替わり、今は国土研究院の傘下ではなく独立した研究機構になりました。韓国では唯一の国の研究機関で、建築や都市形成、まちづくりを担当しています。

近代以前は自分たちで衣食住を作ることが当たり前でしたが、近代以降は衣食住を作るのではなく、買う比率が高くなりました。例えば服や食べ物、飲み物など、近代以前までは全部自分が作ったものを食べたり飲んだり、自分の家や建築のリノベーションも自分自身でやっていましたが、近代になり工場ができてからは、生産者と消費者が分離されました。つまり、近代以前の都市では生産者と消費者が同じで、専門家やアーティストは王様など身分の高い人のために高価なものを作る人に限られていました。しかし近代の都市では必要な生産量が多くなり、プロフェッショナルな専門家は、消費者のために作る人へと役割が変わりました。

けれども最近の都市では、再び「生産者＝消費者」になるトレンドがあります。専門家がYouTubeやSNSで作る方法を教える役割を担うようになりました。人に代わって作ってあげる人から、作る方法を教える人になってきています。

昔テレビに出演していた有名なアーティストや作り手は、このような素晴らしいことをこれほど簡単に作ることができると証明してみせる立場でした。一般の人は素晴らしいと感心しますが、自分がこのようなことをやりたいという気分には全くならないのです。でも最近は専門家が、例えばこの人は韓国では非常に有名な料理研究家なのですが[図1]、料理の作り方をすごく簡単に分かりやすくYouTubeやテレビで教えています。SNSを中心に活動する専門家の影響で、それまでインスタントラーメンしか作った経験のなかった人も、スープや唐揚げなどの簡単な料理を作る機会が非常に増えています。



[図1]

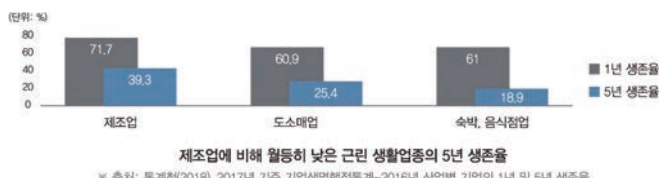


## 建築・インテリアにおけるDIYブーム

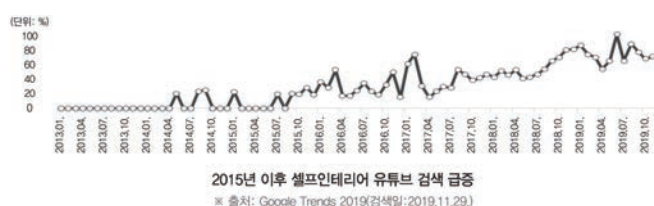
これは衣食住全てに言えることで、建築やインテリアのDIY※1リノベーションでも同じように影響力が広まってきています。成長期の都市では、建築の企画や設計、施工、維持管理などは全てバラバラに発注されていました。オーナーや建築家が一緒に企画し、設計は建築家、施工は職人、維持管理は利用者が行っていましたが、最近の建築は、こうした人たちが一緒に現場で考えて、自分たちの専門知識をシェアしながら場所を作ります。このようなことが、韓国でも日本でもアメリカでもヨーロッパでも新しいトレンドになっています。しかし、家を造ったり建て直したりするDIYは、韓国は他の国よりも遅く始まりました。なぜなら韓国の住宅は、木造ではなくコンクリートのマンションやアパートが大半を占めています。なので、例えば東急ハンズなどで道具や材料を買って、DIYで自分の家を建て直したりリノベーションしたりする人は、あまりいませんでした。でも、最近DIYリノベーションやDIT(Do it together)がトレンドになったきっかけは、住宅ではなくショップ、お店です。韓国は、世界で一番店の生存率が低い国です。この表[表1]のグレーの部分は、1年後まで生存したかどうかを示しています。青色は5年後の生存率ですが、平均17%しか残ることができず、80%以上はつぶれてなくなります。韓国では店の入れ替わりがすごく早く、2年から5年が契約期間です。また、テナントを守るための法律がなく、オーナーの権力が大きいです。オーナーが5年後に退去しなさいとテナントに言えば、法的にオーナーの命令を阻止する権利がテナントにはありません。街中ではすごい早さで新しい店が出たりつぶれたりして、職人さんの人件費が高くなったため、最近では若者が新しいカフェや本屋をつくる時に、自分がDIYで、もしくは友達と一緒にDITでつくるいい店や本屋、カフェ、飲み屋がどんどん増えています。

韓国ではDIYリノベーションをセルフインテリアというのですが、このグラフ[表2]が示すように、2015年以降のYouTubeの検索量が上がって、最近の韓国のトレンドになりました。Ace Hardwareが日本の東急ハンズのようなDIY材料や道具を買う大きなチェーン店です。

※1 Do It Yourselfの略語で、専門業者でない素人が、自分で何かを作ったり修繕したりすること。



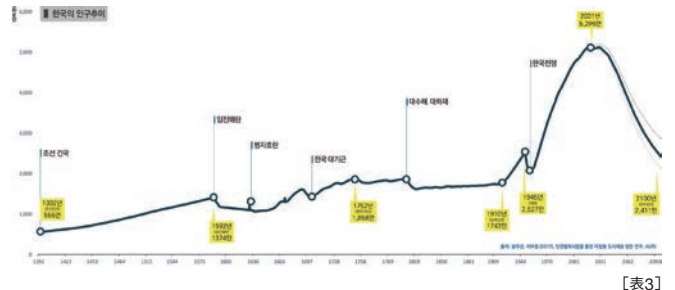
[表1]



[表2]

## 人口減少時代におけるライフスタイル

韓国の朝鮮建国時から2100年までの人口予想グラフ[表3]です。韓国では世界大戦以降、急激に人口が増えましたが、10年、15年後には、同じスピードで2,000万人くらいまで減少すると予想されています。このグラフは山のように見えるのですが、山の頂点はたった1つです。



[表3]

成長期には同じようなライフスタイルが理想とされていました。例えばソウル大学に行ってサムソンに就職し、子どもを2人生んで、100㎡くらいのマンションに住むというライフスタイルが成功した人生だと、学校でもテレビやメディアでも言われてきました。1位、2位、3位、4位とランキングがあり、皆が同じライフスタイルを目指していました。多分、他の国も同じだと思うのですが、オリンピックが開催され、より早く遠くに行ける道路や、より高いビルが建設され、韓国でも同じように新都市がつくられました。

でも、これからは山を下りる時期です。山から下りる道はいろいろあります[図2]。大学に行っても行かなくても、就職してもしなくても、肩書きが2つか3つあってもいい。多様なライフスタイルを持つ人の方が、より格好良くていい人生だと、最近のミレニアル世代※2や10代、20代、30代の人は考えます。

※2 1981年以降に生まれ、2000年以降に成人を迎えた世代。



[図2]

## チェーン店の進出にともなう均質化

都市や公共スペースをつくる人は、多様性をどのような方法で生み出すことができるか考えなければいけません。かつて街にあった多様

性や面白い運営者がいなくなったきっかけは、マクドナルドなどのフランチャイズやチェーン店が進出したからだと思います。成長期には、運営者の個性よりもシステムが重要だとされてきました。『ファウンダー』という映画を見たことがありますか。マクドナルドがどのように始まったかというストーリーの映画です。マクドナルドは、北朝鮮を除く世界のどこにいても、同じインテリアで同じ味のものを食べられることが企業の理想とされています。運営者や作り手のライフスタイルや個性は重要ではないのです。

### 中世からルネサンス、近代、そして現代へ

近代にはこのようなフランチャイズが広がりましたが、実はこのような時代は近代以前にもありました。中世は人よりも神様が最も重要な存在でした。神様に反対する人、つまり運営者のライフスタイルや人の個性が必要だと思う人は、魔女狩りによって処刑されてしまう時代でした。そして中世の直後にルネサンスが起こりました。神様から人に観点を戻し、人がより重要とする文化運動です。ルネサンスはフランス語ですが、英語で言うところのジェネレーション、再生です。その後、近代になると、今度は神様の役割を科学やシステムが取って代わりました。そして今は前時代の科学から、また人に注目が集まっています。最近の若者にどこに行きたいか質問すると、面白くて魅力的な人が運営するコーヒー屋や本屋、クラフトビールの店に行きたいと言います。日本にもたくさんあると思うのですが、これが最近のトレンドです。

### どのように多様性をつくるか

運営者に何が必要なのかというと、よく言われるのが空間とコンテンツと人、つまりハードウェア、ソフトウェア、ヒューマンウェアの3つです。

ヒューマンウェアが行うのは、キュレーションとコラボレーションです。キュレーションは、情報も空き家もたくさんある中で、何が必要な情報か、どれを残すべきか判断します。今後は近代のようにたくさん住宅をつくる必要がなくなります。今は韓国でも空き家がおおよそ130万軒まで増えているのですが、この中でどの空き家がいいか判断できるのはシステムではなく、街のいろいろな人との関係性や面白い空間とのつながりがある運営者だと思います。

「あれは君らしくない」と男性が言って、女性が自分らしいとは何かを考える、というのは韓国のドラマでよくあるシーンなのですが、「～らしい」という言葉はおそらく近代から始まったのだと思います。

今、韓国の職業は16万種類あるのですが、そのうち99%は近代からスタートした職業です。例えば建築家も、韓国で誕生したのは7年前です。近代以前、朝鮮時代の韓国では建築家はいませんでした。美術家やスケッチをする人、大工が建築の設計を担当していて、プロフェッショナルとしての建築家が出てきたのは最近です。世界の全人

口のグラフを見ると、イギリスの産業革命から人口がパッと上がり始め、この時期に建築家という職業が生まれました。最も古くから建築教育を始めた学校はエコール・デ・ボザール※3で、1817年です。ドイツのバウハウス※4は約100年前です。建築家の資格も、世界で最初に始まったのは1987年で、非常に最近です。研究員や教授、先生なども近代に確立された職業です。

職業が発明された理由は、短期間に大量の住宅や工場、公園や服などを作るニーズがあったからで、分業すれば早く生産でき、多くの量を作ることができるので、近代化の過程で分業されていきました。でも、今はそれほど多くの量を必要としていない時期です。ライフスタイルが多様化する中で、職種の壁をなくし、異業種の専門家同士がコラボレーションをしたら、現代に合った面白いことや新しいことが生まれやすくなるので、最近はコラボレーションが非常に重要になりました。これもシステムや科学ではなく、人の特性、性格、個性を知っている運営者がコラボレーションを主導します。多様性を生み出すことも、同じく運営者の役割だと思います。

クラフトも多様化しています。日本ではどのような状況かわかりませんが、韓国では新しい空間をつくる最初のステップが、IKEAに行つて家具や照明を買うことです。イベントやフェスティバルを行う際はコストコへ行って、マフィンなどの安い食べ物を買うことが最初のステップでした。しかし、ポートランドやロンドンに視察に行った際に私が見たのは、ポートランドでは空間をつくる最初のステップが、地域で捨てられた古い家具や木材をリビルディングセンターという場所に全部集めて、それらを使って新しい店や家を作るところが面白かったのです。IKEAで買った家具より歴史があり、人が使った家具を自分の街でもう一回りサイクルすることで多様性をつくり、魅力的な空間をつくるのではないかと思います。

※3 17世紀にパリに設立された高等美術学校。フランスで最も権威がある美術大学と言われ、建築、絵画、彫刻の分野において多くの芸術家を輩出してきた。

※4 1919年にドイツに設立された美術学校。工芸、写真、デザイン、美術、建築などの総合的な教育が行われた。

### 地域基盤スタートアップの増加

DITやDIYはハンドメイド・アーバニズムにどのような効果や影響をもたらすのでしょうか。地域基盤のスタートアップというキーワードを考えてみました。

Life Outside of Work(仕事以外の生活)という視点で見ると、近代はホワイトカラーもブルーカラーも体力が必要とされる仕事を中心に、会社や工場を出て街や家に戻った後は、リフレッシュするために、映画館や家のソファにもたれて、自分や家族ではなく、テレビや映画に出てくる誰かに自分を笑わせてほしいと考えてきました[図3]。

でも最近はクリエイティブな仕事を中心に、会社では体力よりも想像力を必要とされます。街や家に戻ったら、体力ではなく想像力をリフレッシュすることができる場所が求められるようになりました。例



えば仕事の後に、魅力的でエキサイティングな運営者がいる本屋や飲み屋に行き、ご飯を食べたりお酒を飲んだりしながら運営者と会話をし、新しいアイデアを考えます。このような店や面白いパブリックスペースが多くある街に、ITのスタートアップ企業が進出するようになりました[図4]。



[図3]



[図4]

これらのスタートアップ企業は、技術基盤のスタートアップと、空間や場所から新しいこと、創造的な場所をつくる地域基盤のスタートアップの2種類に分けられます。技術基盤のスタートアップは、非常に頭の良い人たちが手がけます。韓国ではソウル大学、日本では東大や国立大学の卒業生でごく限られた人たちが、大きな利益を生み出します。このパターンが、技術基盤のスタートアップだと思います。でも普通の人、地方の大学を卒業した人や大学に行かない人、お金持ちではない人は、どのような生活をすればいいのでしょうか。ロングテール理論※5でいうと、ダイナソーの頭がFacebookやTwitter、Instagram、Googleのような技術基盤のスタートアップだとしたら、地域基盤の本屋や飲み屋などがテールの部分に該当します。このロングテールを全て集めたら、実は技術基盤のスタートアップの方が売上が少ないことがあります。

技術基盤のスタートアップと地域基盤のスタートアップの売り上げや国に対する寄与、産業力は大体同じではないかと思いますが、技術基盤のスタートアップは、同じコンテンツの範囲が広がり、利益を出します。例えばFacebookだったら、ハーバード大学内のネットワーキングから同じコンテンツでアメリカや全世界に広がり、スケールアップして利益を出しますが、地域基盤のスタートアップは、同じ地域でいろ

ろなコンテンツを広げて成長していきます。例えばポートランドを本拠地とするAceホテルも、創業者のアレックスが、自分はホテルの専門性は全然持っていないけれども、面白い人を集めるのには自信があると言って、Aceホテルの他にStumptownというコーヒーショップ、やAceアトリエというデザイン会社など、いろいろな種類の店や会社を同じ地域につくりました。冒頭でもお伝えした通り、今はSNSを通じて専門家から簡単に技術を習うことができるので、最近韓国では、このようにいろいろなコンテンツを同じ街で提供する会社が増えています。これらの会社を、私は地域基盤スタートアップと呼んでいます。

※5 大手企業の売上を、それ以外のニッチな中小企業の合計売上が上回るとする理論。

### ハンドメイド・アーバニズムはどのようにつくられるのか

DIYアーバニズムやタクティカル・アーバニズム※6、DITとも自分はこのですが、これらは最近非常に人気のある概念です。ポートランドに行ってインタビューやヒアリングをした際、インタビューされた人は大体、私はthinker(思想家)ではなくdoer(実行家)だと答えました。企画や計画をする人ではなく、実際に行う人で、計画するよりも実行することが重要だと答える人が大変多かったのです。最近福岡でもそうした人が増えています。建築や他の分野でも、自分をdoerと呼ぶ人が多くなりました。韓国でも同じです。なぜなら建築と都市の専門家は世界共通だと思うのです。

世界大戦以降の1910年から1920年頃は、トップダウンの都市計画が行われていました。政治家や専門家が決めて、住民は自分の街で何が起ころうとも分からないうちにブルドーザーが飛び出してきました[図5]。その後、1960年頃からはボトムアップの住民参加型まちづくりが行われるようになりました[図6]。でも実際は計画と現実とは違って、住民参加のまちづくり計画を作っても、現実になればいろいろなことが起こり、結局は想像していた通りにはいかず、おかしなことが起きる事例も多かったのです[図7]。

DIYアーバニズムやタクティカル・アーバニズムは、合意の上で実行するのではなく、実行、つまり施工しながら合意していく手法です。社会実験でよく使うLQC(Lighter,より軽く / Quicker,より早く / Cheaper,より安く)という方法を、都市計画や建築設計にも取り入れて、安い塗料やプラスチックの椅子などを使って、このようなことをやります[図8]。これは韓国でも試してみたいと思いました。

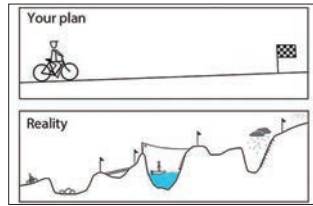
※6 市民や学生などが一人からでも始められるような小さな実験を実際に街で行い、目で見て分かる空間の使い方を提案し、短期間で効果を明確にするまちづくりの方法。



[図5]



【図6】



【図7】



【図8】

### 群山の若者のプライドを取り戻す

韓国の群山という都市は人口26万人、韓国の中央の海側にある小さな都市です。群山は新都市が2つつくられ、地方都市の中でもマンションの比率が一番高い街です。人口が少なく、産業もあまりなく、観光客もいない街です。

この街で何より早くやりたかったのは、街の人のプライドを高めることでした。なぜなら韓国の若者たちは、10人中8人は自分の街に住み続けたいと思うのですが、この街には文化や仕事がないので、ソウルに行く人が多いのです。

韓国で有名な地図があります。ソウル以外は全て地方都市で、何もない街だと示す地図です。韓国内の文化施設と文化活動の数を比較すると、大体ソウルに集中していて、群山や地方都市では全然面白いことはありません。地方都市のイメージは老人や負け組が多く、観光地化されている、一方ソウルのような大都市はチャンスも多く、楽しみや仕事もある都市だと思われています。地元に残る青年たちは負け組だという感覚があります。群山の若者も、以前は自分たちが負け組だと思って、新しいことを始める気がない状態でした。群山の若者は、ソウルに行きたい、ソウルのようなことを自分の街でやりたいと思っていますが、ソウルの若者は東京や横浜、ニューヨークのようなことをやりたい、海外に行きたいと思っています。

多分、昔の日本と同じではないかと思うのですが、韓国では行政が決めた活動以外はできません。講演会なども専門家や大学教授、政治家が決めて、文化施設では行政が決めた文化活動しかできません。地方都市では市民が自らやりたいことをする機会や予

算がないので、行政がこれは文化施設、これはスポーツ施設、これは公園といったように市民の活動を決定します。しかし私は、地方都市は遊ぶところや見るところ、することがなくて地味な都市、負け組の都市だとは考えていなくて、群山でもニューヨークのような面白くて魅力的なイベントなどができるということ、行政にやってもらうのではなく、自分たちでつくつたらいいのではないかと群山の若者に話しました。DITであればお金もそれほどかかずに簡単にすることができるし、受動的な空間ではなく、もっと能動的な空間に変えましようと言いました。若者の中にはスケートボードやDJが好きな人が多いのですが、群山ではDJをするクラブもスケートボードに乗るスケートパークもありませんでした。それなら自分の都市では何もできないと言わず、自分が好きなことをできる場所を友達と一緒につくればいいのではないかと考え、DITを提案しました。

### DITで設計者、職人、参加者が一緒に作る

最初はゲストハウスのラウンジスペースを作りました。日本でつみぎ設計施工社という会社を運営する河野直さんと河野桃子さん、DIYリノベーションを350回以上やってきたチームが韓国に来て、一緒に企画に参加し、河野さんからやり方を習って進めました【図9】。これはそのときに撮った映像です【QR】。

2019年12月のDITフェスタでは、カフェのバーテーブルを作りました。群山はかつて海側の造船業が盛んでしたが、今では造船所は全てなくなり、廃船が多くありました。そこでIKEAではなく、廃船のパーツを使って世界でたった一つのテーブルを作りました【図10】。

20人が2つのチームに分かれ、労働作業としてではなく、文化活動として、フェスティバルで遊ぶような感覚で3日間かけて行いました【図11】。地元の大工さんも手伝い、参加者に安全な道具の使い方や施工のやり方を教えてくれました【図12】。

これが捨てられた船のパーツです【図13】。ここから面白いパーツを選び、設計者と施工者、オーナー、住人、参加者、研究者と私が現場でチームになって、一緒にアイデアを出しました。参加者がアイデアの投票をして、1位、2位、3位と決めたり【図14】、夜は一緒に飲んだり【図15】、楽しみながら作りました。

カフェの設計者は今、韓国の若者に非常に人気があるローカルスティッチという建築家で、この写真の一番左の2人が設計者、真ん中の人が職人さんですが【図16】、この人たちがDITの概念が好きで、ボランティアで設計してくれました。これが元々の設計図面です【図17】。設計者が現場に行って船のパーツや面白い材料を見つけ、参加者と会話をする中で新鮮なアイデアが出てきたので、そのアイデアが実現できるかどうかを職人さんに相談しながら、元々の設計図と全く違うものを作りました【図18】。





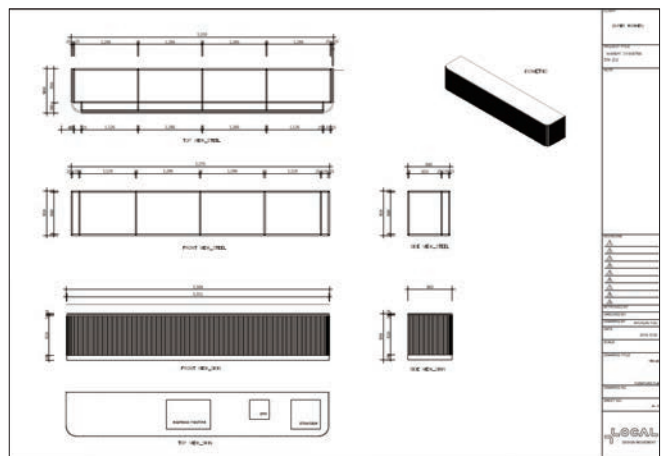
[図9]


<https://youtu.be/1ikcRTKNz4o>


[図16]



[図10]



[図17]



[図11]



[図12]



[図18]



[図13]



[図14]



[図15]

### 屋上にスケートボードパークを作る

群山は元々アメリカ軍基地がある都市で、昔から軍人が街に行ってスケートボードを買っていました。ですから、スケートボードを売るボードショップは、韓国の南側では今は群山にしかないのです。そこで、ソウルではまだ流行していないけれど、ニューヨークや東京など海外で人気があり、オリンピックの競技にも採用されたスケートボードのスケートパークを屋上につくれば、群山の人も自信を持つことができるのではないかと、このようなコンテキストなら勝負できるのではないかと思います。

キム ジュンオプ

これは韓国で一番有名な建築家である金重業※7、日本の丹下健三さんのような方ですが、金重業さんが設計した建物です[図19]。この建物には、周りの住民や公務員もその存在すら知らなかった屋上がありました[図20]。このような素晴らしい空間があるので、ここ

でソウルにもないような面白いことを企画すれば、地元の若者にもブライドやモチベーションが生まれるのではないかと思います、DITフェスタを企画しました[図21]。50人くらいの参加者と専門家が集まり、中国産の広葉樹のツーバイフォーで1枚1,000円くらいが一番安い材料を使って、スケートボードパークを作りました。そのときのムービーです[QR]。屋上にスケートパークを作ることは意外と簡単で、全部作るのに3日間くらいでできました。

※7 1922年、大韓民国生まれの建築家。1941年、横浜高等工業学校(現・横浜国立大学)卒業後、松田平田建築設計事務所勤務を経て帰国。韓国代表の1人として参加した第1回世界芸術家会議でル・コルビュジェに出会い感銘を受け、1952～56年にル・コルビュジェ事務所に勤めた。



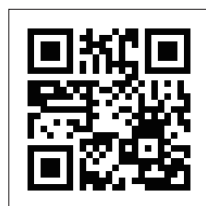
[図19]



[図20]



[図21]



<https://youtu.be/MVrH5IzV-Q4>

### 韓国政府の空き家対策とその問題点

少し堅い話なのですが、韓国政府の政策では、3つの方法で空き家問題に対応しようとしています。1つ目は補助金を出して、そのお金で空き家をリノベーションすることですが、これは全く予算がありません。2つ目はまちづくりセンターや都市再生センターが住民を対象に教育活動を行うことですが、これはあまり有効ではなく、教育活動を行っても、その活動に参加した人が自分自身で空き家を全くリノベーションしないのです。3つ目は職人さんの支援事業ですが、これも登録しているだけです。職人さんは今でも収入が少ないので、職人さんに対しても設計や施工の教育など、もっとさまざまな支援をしなければ、自立できないと思うのです。職人さんがDITワークショップを企画・運営したり、自分自身でリノベーションの仕事もしたり、いろいろなことができることが、未来の職人さんの理想形ではないかと思います。今、群山では若い職人さんを対象に、このような活動を既に4回行っています。



# DISCUSSION

重村力

(神奈川大学工学研究所客員教授、アジア研究センター客員研究員)

石田敏明(神奈川大学工学部建築学科教授)

曾我部昌史(神奈川大学工学部建築学科教授)

**山家** どうもありがとうございました。私たちの研究室の活動と重なる部分も多く、非常に興味深いお話でした。

それでは、質疑応答、ディスカッションの時間に移ります。まずは私からよろしいですか。

群山のハンドメイド・アーバンイズムの具体的なプロジェクトのスタートには、建築都市空間研究所の他に国や自治体関わっているのでしょうか。また、実際にこれはどのようなスタイルで始まったものなのでしょうか。

**ユン** 韓国政府の都市再生ニューディールという政策があります。韓国内の100カ所の都市を対象に、毎年1兆円の補助金を出して都市再生を行う政策です。この政策で2019年に群山の建物を選ばれて、約8,000万円の予算で4年間建物をリノベーションすることが決まり、2020年の頭に群山市から建築空間研究院に委託されました。研究院は国の研究機関なので、普通は自治体からの委託研究は受けませんが、今回は韓国の最初のPPP、パブリック・プライベート・パートナーシップのプロジェクトでした。つまり、補助金だけでなく自治体の建物で収益を得られるよう税金を安くして、公営事業として自立した運営ができるかどうか実験してみようというかたちで始めました。当初は地域の調査やインタビュー、ヒアリングなどを第1段階として計画していましたが、9月にスタートし、10、11月の天気が非常に素晴らしかったので、この季節に実際に社会実験をやってみたいと思い、順番を逆にしてDITを先に行いました。今はインタビューや地域調査をしているところです。

**山家** 分かりました。今のお話だと、100カ所の都市に選ばれたときには、ハンドメイド・アーバンイズムというようなキーワードはなかったのですか。

また、群山市が対象として選ばれたのですか。それともリノベーション対象の金重業さんのホールが選ばれたのですか。

**ユン** ハンドメイド・アーバンイズムというキーワードはありませんでした。

対象となった市の地区、約10万㎡の中からホールがあるところが選ばれて、具体的にやることについては、建築都市空間研究所のチームが実際にアイデアを出しました。

**重村** 先ほどの建物を設計した金重業さんは、ル・コルビュジェの事務所で吉阪隆正さんと一緒に働いていた建築家です。僕はよく知っています。

群山は有名ではないと言うけれども、かつてはヒュンダイの造船所もあったし、朝鮮戦争のときには米軍の空軍基地もありました。だから古い日本人はみんな群山のことを知っています。そこに誇りを持たせるプロジェクトとして、すごく優れていると思って聞いていました。

一つ質問があります。金重業さんの建物の屋上にスケートボードパークを作ったのと、造船所のスクラップでバーを作ったのは、同じ政府のプロジェクトですか。

**ユン** 金重業さんと知り合いだという方に初めて会いました。すごいですね。

バーを作る事例は、国や自治体の予算ではなく、自分の建物をリノベーションしたいという友人からの依頼があって、私の研究所でもDITという新しい概念を現場に適用したいと思っていたので、お金も全部自腹で行いました。

**重村** つまり、プライベートな行為として行った街の再生実験ですよね。

もう一つ聞きたいのですが、前半の話で非常に興味深かったのが、現代の韓国社会は大変魅力がある一方、閉塞している印象もあります。それは、まさしくあなたが言ったように、出世街道に乗ろうとして息子もお母さんも必死になって、ソウル大学に進学し、サムソン<sup>キョンギド</sup>に入社して、京畿道<sup>※8</sup>の100㎡のマンションを、日本では上がりというのですが、ゴールにしていると、かわいそうだと思ってしまうのです。

以前にイルジさんと大邱<sup>テグ</sup><sup>※9</sup>のまちづくりを見て歩いたら、ものすごくバラエティーというか多様性があって、非常に豊かなことが街の中で展開していました。釜山<sup>プサン</sup>の街を歩いても面白いし、そういうことと出世街道のようなことが起こる韓国は同じ国かなと思うぐらい違うのです。

それで、先ほどのあなたの説明でそうかと思ったのは、僕はもう何十年も韓国と付き合っているのですが、すごく気に入った店を見つけても、3年後に行くとなかったりするのです。日本では少なくとも3年ではなくなると思います。けれどもあなたの話だと、大家さんの権利が強くてテナントが負けてしまうから、その辺りに問題があるのかなと思います。

また、どうしてあのような高層ビルばかり建てて、みんながそこへ入ろうとするのか、疑問に思います。日本では少し郊外でもいいから一戸建ての家が欲しいという人はいても、高層マンションに入ろうと



は大体思わないのですよ。現代韓国のその辺が、僕には謎なのです。

※8 韓国北西部に位置するソウル周辺の行政区。ソウルよりも人口が多く、韓国で最も人口の多い広域自治体。  
※9 ソウル、釜山に次ぐ韓国第3の都市。

**ユン** 韓国の中でも、特に地方都市に移住する若者は、バラエティー豊かなライフスタイルが好きな人が多いです。例えば群山のホールの周りのマンションは、60㎡くらいの面積ですが、値段が170万円くらいで非常に安いのです。多分ソウルのマンションの敷金に相当するくらいでしょう。それで平日はソウルに住んで、週末は群山に行き、新しく面白い事業をやりたい人もいるし、地元の人も気軽に何かを始められる街です。その上、重村先生がおっしゃった通り、港町なので、昔から海外や他の都市から来る人が多く、市外の人との交流が自然にできる街です。

ソウルや他の都市の若者も多分同じだと思うのですが、港がある  
インチョン  
仁川や釜山、群山は、最近若者に人気のある都市になりました。なぜなら年上の人もニューウェーブに対して理解してくれる雰囲気があります。群山は昔から日本人と韓国人と一緒に住んでいた町だったので、今でも日本式家屋が178カ所くらい残っています。この日本式の近代住宅が好きな観光客がたくさん来てくれます。また、韓国に現存する日本式の大きなお寺で、完全な模様が残るお寺は群山にしかありません。

権利に関して言えば、日本でまちづくりをする友人、例えば福岡のスペースRデザインの吉原勝己さんから聞いた話では、日本では借地借家法の規制が強く、テナントよりオーナーさんの権力が弱い場合もあるそうです。しかし韓国では、オーナーさんの権利が非常に強く、法律でテナントの権利を守る期間は5年です。でも、5年以内でもオーナーさんが少しお金を出せば、テナントを退去させることができます。

**山家** 韓国ドラマの「梨泰院クラス<sup>※10</sup>」にもそのような場面が出てきましたね。

※10 韓国のケーブルテレビ局で2020年に放送され、高視聴率を記録したテレビドラマ。ソウルの飲食店激戦区・梨泰院を舞台に、飲食業界での成功を目指して仲間と共に奮闘する若者たちを描いている。

**ユン** そうですね。そういう国ですので、5年後の生存率が18%とすごく低く、3年でなくなるお店はたくさんあります。韓国でお店を運営する人や、小さな自分のお店を作る人にとって重要なことは、安く作ることです。いつなくなるか分からないので、できるだけ安く作って、再契約の時期にまたお金を投資して、もっといい店にリノベーションをします。ですから最初の段階では、大工さんや職人さんに頼まず、友達と一緒にDITで完成させ、内装費を下げることが重要です。そのようなわけで、最近若者の中ではDIYやDITが盛り上がり、ブームになっています。

**石田** ボランティアのような人たちが、大工さんや専門技術を教える人と一緒になってつくるといっていますが、ボランティアの人たちはどうやって集めているのですか。友達から声をかけて集まってくるのでしょうか。それとも公募をして、このようなイベントがあるから参加しませんかと公に呼び掛けをするのですか。

**ユン** 参加者はボランティアではなく、お金を払って参加しています。屋上にスケートパークをつくるフェスタでは、参加費は1万5,000円でした。参加費には食事代と宿泊費、あとはヘルメットなどの必要備品代も含まれています。2020年はコロナ禍により、思うようにプロモーションができませんでした。1回目はオンラインとオフラインで、参加者の半分は市内、半分は市外の人でした。2回目はほぼ全員が市内在住で、4回目は7割が市外で、3割が市内在住でした。4回目のフェスタでは、地域で広報することに危うさも感じました。なぜなら、金重業という有名な建築家が設計した建物の屋上にスケートボードパークを作ることに、周りの人からクレームが出ることも考えられたので、地域内のプロモーションはあまりしませんでした。韓国ではスケートボードはすごく危ないスポーツと思われるので、一般的なスポーツではないのです。ですから、企画段階では年配の人たちに嫌がられるかもしれないと思って、市長と市職員に報告してOKをもらい、公募を始めました。完成した作品を見たら周りの人たちは喜びましたが、企画段階ではクレームが出るのではないかと心配していました。

**石田** 現在、直通のエレベーターはあるのですか。また、屋上を使える時間帯は決められているのですか。

**ユン** エレベーターがなかったので、大問題になりました。建物が7年前にクローズし、その後ずっと使われていないまま、遊休の状態であって空いていました。電気も通っておらず、水道も壊れていて水も飲めず、非常に大変でした。トイレも屋上にはなかったので、1階まで降りて隣の店のトイレを使わせてもらいました。

初めの企画段階では、2週間くらいの使用期間を想定していましたが、予想よりもきちんとできたので、雪が降る前までは運営できるのではないかと思います。今は群山にあるスケートボードグループのリーダーさんに鍵を渡し、リーダーさんが管理をしています。

**質問者A** とても興味深い内容でした。いつもFacebookで様子はうかがっているのですが、本日は具体的に詳細なお話を聞けて、本当に良かったです。

2点伺いたいののですが、まず1点は、私は昔からずっと見ている中で、韓国では非常にパイオニア的というか、先進的な取り組みだと思

うのですが、その取り組みに対して、他の自治体の都市再生の現場からはどのような評価をされているのかを教えてください。

もう1点は、本日はDITについての説明はされたのですが、地域管理、エリアマネジメントの話はされていなかったで、今後どのようなご計画なのかを教えてください。

**ユン** この取り組みは、韓国では驚くほど一般的ではないのです。でも私は2015年から今の研究機関で報告書を書くだけではなく、地方都市の自治体ではできないことを、自分と周りの民間チームと一緒に作って新しい事例を見せてきました。政府や他の自治体も、これができるということが分かればまねをします。韓国の都市再生やまちづくりは、最初は大体全て市民団体が主導してきましたが、今では民間の株式会社も地方創生や都市再生のプレーヤーになりつつあります。また、政府が株式会社や民間会社を支援する政策があります。今後、群山市内で空き家の多い地区を、地域管理会社と再生させる計画があり、<sup>チュンチョン</sup>春川や釜山の自治体でもその事例をまねて、都市再生の取り組みが始まりました。

地域管理会社のプレゼンテーションは準備してきたのですが、時間がないので、簡潔にお話しします。20年以上空き家のままだった非常に問題のある市場がありました[図22]。この市場をいろいろな方法で再生させようと、地域管理会社とまちづくりをしました。街を調査して、インタビューをして、全部図面を描きました。このエリアは全部空き家で、ブロックの真ん中には法律上建ててはいけない不法住宅もありました。空き家のオーナーが誰なのかは市役所も知らなかったで、聞き回ってやっとオーナーが見つかりました。その建物をきれいに塗装して、小さな事務室にしました。しかし、やはり収益が出なければ面白い人は参加しないので、この写真のように新しくリノベーションしました[図23]。

私は、国や都市といった大きな単位ではなく、街中の街区や通りといった小さなエリアで考えることが重要だと思っています。地域管理会社は行政から補助金をもらうのではなく、自らの会社の収益で地域に再投資をするというコンセプトで運営しています。この会社の仕組みは、オーナーと契約をしてサブリース※11を行い、地域のブランディングやプロモーション、空間のデザイン、公共施設の維持管理や、イベント・祭りを企画運営し、不動産の管理もします。このように街のお店にサービスを提供して運営します。

日本のジャニーズのような芸能事務所が、韓国の街中でも必要ではないかと思っています。街に住む魅力的なプレーヤーを見つけて教育し、周りからの突っ込みもカバーします。この街の中で一番面白い人に地域管理会社を担当してもらうように頼んでいます。

※11 物件をオーナーから賃借し、それを第三者に転貸する事業形態。



[図22]



[図23]

**質問者A** ありがとうございます。私は一応全部理解できましたが、多分他の方は分からなかったと思います。その管理会社が今回のDITで作った場所や市民ホールと一緒に管理をされる予定ということでしょうか。

**ユン** 地域管理会社とホールは3、4キロくらい離れていて、歩くと30分くらいかかります。ホールの管理会社は、2021年から社会実験の方法を使って選ぶ予定です。選定方法も、プレゼンテーションやパネルだけではなく、第1段階で3つのチームを選び、3チームそれぞれに150万円ぐらいの予算を出して、1週間で自分たちがやりたいことを小さな社会実験としてやってみなさいといって、その結果を見ながら選ぶ予定です。

**質問者A** その選定方式は面白そうです。ありがとうございます。

**質問者B** 今見せていただいた事例は、空き家と言っていますが、空き店舗ですよね。なぜ空き店舗になったのかということですが、

はやらない古いお店にだんだんお客が来なくなって、古くさいマーケットから次々に抜けていって寂れていたのを、資本を投下して全部リノベーションをし、新しい業種に変えていったからうまくいっているのでしょうか。

**ユン** このヤンワータウンは、元々アメリカ空軍があった街です。かつては街の収益の大半が、アメリカ軍人の着る大きな服を作る店や、ウェスタンバーなどでしたが、空軍が他の街に移り、産業が衰退しました。そして今の群山は、日本式住宅や日本式の建物が好きな若者が観光に来る街なのですが、60、70代の住人たちは、幼い頃の日本式建物の記憶があります。一方、若者にとっての群山の街は、昔、アメリカの軍人と一緒にハンバーガーを食べたり、スケートボードに乗ったりした記憶があります。今の地域管理会社の代表も37歳くらいの人で、自分が子どものときの記憶をブランディングして、バラエティー豊かな群山をつくりたいと思い、群山で初めてウェスタンバーや日本酒バー、スペイン料理屋さんなどの小さいけれども国際的な雰囲気の街をつくりました。それが成功の要因です。

**曽我部** 面白い話をありがとうございました。考えていることもおやりになっていることも、割と自分の研究と重なっているところがあって、ここにも仲間がいたという感じがしました。また改めて情報共有をする時間が取れるといいなと思いました。

変な質問なのですが、こういうことを日本で進めようとする、多くの場合はネガティブなことを言う人が突然現れるのです。そういう場合はどうしていますか。

**ユン** 群山でも多かったです。私は初めの1年間は、何もやらず、群山の街の人みんなに会って、全てのカフェや飲み屋、ゲストハウスなどに行って、運営者と話をしました。そして、この人とこの人は仲がいい、この人とこの人は仲が悪いといった人の関係性の地図を作りました。これはオープンにできないのですが、パッと見ると仲が良さそうでも、何回か会ったら本音を言ってくれて、実はあの人は嫌いということがあり、ドラマのようなグルーピングができました。これをシステムや理論的に整理することは多分できないと思って、個人的な判断でしたが、このグループの中で一番自分と気が合う人や将来性がある人とやりました。

でも、今回は社会実験としてどのようなグループでも機会を与えます。自分の強みや自分が一番得意なことを、周りの住民やお店の人にプレゼンして、その人たちが評価したり、私の研究所では売り上げや通行人の数を全て調査して、運営者や地域管理会社のチームを選択したり、もっと発展性のある手段や方法を使って進めたいと思っています。

**曽我部** ありがとうございます。最近僕が直面したのは、一方通行にする社会実験です。両方向通行の道を一方通行に変えるという社会実験を地域と進めていたのですが、社会実験なので、一度実験するくらいいいではないかと随分説得をしたのですが、「実験をしたら、結局おまえたちは既成事実化してそのままにしまうのだろう」という人たちがたくさんやってきて、結局社会実験もできませんでした。まだ諦めてはいませんが、なかなか苦労しますよね。

**ユン** 群山の活動は今年が5年目で、群山の市長や公務員、住民からは、何をするかは分からないけれども、少しは信頼できるという意見があります。一方、今でもネガティブな反応はあります。地域の新聞記者も同じです。でも、やれるだけやりたいと思います。

**山家** それでは、そろそろ時間となりましたので、本日の講演会を終了いたします。今一度ユンさんに拍手をしていただければと思います。ありがとうございました。



---

**Vol.1**

**客家の円型土楼 ― その建築様式と集住の知恵**

講師: 重村力 (建築家・工学博士)

日時: 2020年11月9日

---

**Vol.2**

**ハンドメイド・アーバニズム**

講師: 尹柱善 (建築都市空間研究所まち再生センター長)

日時: 2020年12月7日

---

**Vol.3**

**台湾における都市の歴史的環境保全**

講師: 藤岡麻理子 (横浜市立大学グローバル都市協力研究センター特任助教)

日時: 2021年2月1日

---

**Vol.4**

**「竹」の活用で1分の1から、1万分の1まで ― カレン集落の再生プロジェクト**

講師: Terdsak Tachakitkachorn (バンコク チュラロンコン大学建築学部 Assistant Professor)

日時: 2021年2月22日

---

**Vol.5**

**ベトナム・ハノイ 変化する都市の文化遺産**

講師: 柏原沙織 (東京大学大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻 特任助教)

日時: 2021年7月20日

---

**Vol.6**

**ベトナム・サイゴンの建築と都市の文化**

講師: 李暎一 (一般社団法人アジア建築集合体 会長)

日時: 2021年8月25日

---

**Vol.7**

**メトロマニラにおける参加型社会住宅 People's Plan: 参加の価値の再考**

講師: 白石レイ (山口大学大学院創成科学研究科 准教授)

日時: 2022年3月2日

発行 神奈川大学アジア研究センター

〒221-8686 神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1 電話: 045-481-5661

デザイン 丸山智也、野中優衣 (マルヤマデザイン)

編集 吉岡きくみ

2021年3月22日発行